支部教研ニュースno 2

２００８．１０．１　高教組南部支部　発行

学力それは何？
みんなに必要なもの？

●　ユネスコ学習権宣言の冒頭　1985 年 3 月 29 日採択

学習権とは、
　読み書きの権利であり、
　問い続け、深く考える権利であり、
　想像し、創造する権利であり、
　自分自身の世界を読みとり、歴史をつづる権利であり、
　あらゆる教育の手だてを得る権利であり、
　個人的・集団的力量を発揮させる権利である。

●　OECD「コンピテンシーの定義と選択（ DeSeCo ）」2003 年報告

「私たちはそれぞれの人生と社会でよく機能するためには、どんな能力（コンピテンシー）が必要でしょう?」「能力はまさしく知識と技能以上です。それは、心理社会的なリソース(技能と態度を含んでいる)を活用して、特定の文脈の中で複雑な課題にこたえることのできる力」であるとしています。特に、

① 人生の成功や社会の発展にとって有益、
② さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、
③ 特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、

といった性質を持つとして選択された次の3つを「キー・コンピテンシー」としています。

社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
多様な集団における人間関係形成能力
自立的に行動する能力

「この3つのキー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性です。深く考えることには、目前の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはまることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え、行動する力が含まれます。」と述べられ、「変化」、「複雑性」、「相互依存」に特徴付けられる世界への対応の必要性が強調されていますが、それは、急速にグローバル化する世界と科学技術の発展を意識したものでしょう。

●記念講演　**２００８．１０．１５(水)　14:30　知念高校　体育館**

演題　「競争原理を超えて」～ウチナー流「学び合い」のすすめ～

講師　山　本　隆　司　（沖教組副委員長・教文部長）

（講演レジメから）

「教育と競争」「学力と競争」という観点での比較

☆「イギリス」モデル

＊１９８８年のサツチャー政権の教育改革法制定
・国家カリュキュラムの制定→学習指導要領
・全国統一学カテスト　７歳一１１歳一１４歳　　英語一数学一科学
・「リーグテーブル」で成績一覧表を公開
・学校選択制とバウチャー制度、教師の評価制度
・「競争原理と成果主義」
・その後、労働党のブレア政権一一？

☆「フィンランド」モデル

＊フィンランドの90年代前半は、80年代末の金融・不動産バブル崩壊に加えて、91年のソ連崩壊の影響を受けて、旧ソ連・東ヨーロッパ地域の経済混乱でこれらの地域への輸出が激減し、深刻な経済危機があった時期
＊地方分権、現場主義に基づいた教育改革
＊1992年に教科書検定の廃止、1994年にはカリキュラムの大綱化か実施され、国家による教育規制を大きく緩和し、決定権を地方自治体や学校に与えた。

☆「沖縄」での２５年

＊１９８３年　ユイマールと地域一体型の学校教育
＊１９８８年「達成度テスト」小６と中２（昨年から小４と中２）
・高校の小学区から中学区、全県一区の公立進学校
・学力の二極化、低学力漕の増大、深刻な生活指導‥‥
・教職員評価制度
・教員の病気休暇・休職の増大（精神疾患病休、全国の３～５倍の発生率）

☆昨年から「全国学カテスト」

＊２年連続の４７位マスコミ報道
＊２０年の「達成度テスト」と同様の「傾向と対策」
＊学対の２０年間の総括も反省もなく、規模を拡大して繰り返す「シンドさ」
＊不動産業者の学校の格付け
＊民間塾産業の教育内容支配。ベネッセの通信添削、宮崎のU氏の講演会

☆PISAショック＆「全国学カテスト」＆沖縄「学力向上運動」

＊日本の学力は本当に低下したの？PISAの見方
＊今の中学から「高校受験」と「部活動」を無くしたら？
＊「覚える学力」と「考え出す学力」
＊「習熟度別学習」と「ユイマール学習」
＊「ムシの目の学び」と「トリの目の学び」

☆これからどうするのか！

＊フィンランドの様に教育の無料化、少人数学級が可能か→財政問題
＊金が使わなくてもできることがある。→人の管理や序列化や競争にも莫大な金がかかる
＊「達成度テスト」、全国学カテスト、教員評価システム、教委の学校訪問、「教員免許更新」‥　それをやめたら、金が浮いて現場がよくなる。
＊沖縄の全国よりすすんでいる教育制度
・幼稚園
・学校図書制度
・学校と地域一体型の教育

☆近い将来日本も移民の自由化→

一つの教室に他民族, 多言語, 多宗教の子ども達
・多文化共生の教育システム
・もともとウチナーはグローバルで多文化共生社会、助け合い（ユイマール社会）
・ウチナー社会の教育力は国際的な視野を備えている。
・東京志向の競争学力と決別して、アジア・世界に目を向けたウチナー教育の構築を

教育

「学力」の未来

沖縄から全国テストをよむ

●●1

山本 隆司

「PISA」ショック

二〇〇一年、「PISAショック」なるものが話題となった。

PISA(学習到達度調査)とは、OECD(経済協力開発機構)が実施している国際学力調査である。三年ごとに「言語」「数学」「科学」の三分野で、その国あるいは地域の学力や教育政策、教育制度の実態、分析などを発表している。

当時、新聞では「日本の学力、世界トップから転落」の活字が踊った。全国的に低学力が話題となり、「全国学力テスト」も提唱された。

昨年四月二十四日の「全国一斉学力テスト」は、従来の学力テストとは少し形式が違った。A問題(基礎・基本)、B問題(応用・活用)、学習や生活の質問調査の三種類あり、A問題、B問題、質問調査を同時に行い、クロス集計する方法が取られた。PISAを強く意識してのことである。

沖縄県は国語、算数・

応用力と学習意欲低下

数学のすべての分野で全国最低の四十七位の結果となり、「大きな衝撃を受けた」と県教育長のコメントが報道された。沖縄県の二十年来の教育施策の一番の柱であった「学力向上対策」の成果が問われることとなった。

B問題の低さは予想できたが、A問題でも思ったような数字は出なかった。特に中三の数学ではA・B問題とも全国平均を大きく下回った。県独自の「達成度テスト」では、年々平均点が上がり、県目標の通過率「80%」を十分達成していたが、「全国学テ」では全く通用しなかったことが分かった。

今回の「全国学テ」がPISAを意識してのものならば、今後はB問題を重視する形式にさらに移行していくものと思われる。沖縄の達成度テストも継続するならば、B問題のような形に変化していかざるを得ない。

戦後一貫して日本の学力は「読み書き計算」等基礎学力は高いが、応用・活用力は弱いことが指摘されてきた。PISAや全国学テの結果は、あらためてそのことを示しただけで、そのための授業も有効な対策も取られてこなかったことも分かってしまった。

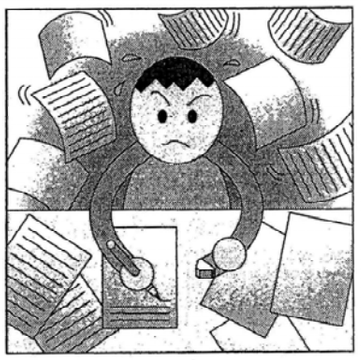
「学力向上」と言いながら、暗記中心の試験対策授業に重きをおいたことにより、多くの子どもが「学び」に背を向け始めている。これは深刻にとらえなければならない。本当の「PISAショック」は、テスト対策型暗記学習からくる「応用・活用」学力の低迷、競争による学習意欲の低下である。PISA型テストの「知識をどう活用するか」という物差しにおいて、日本の「学び」の質のメッキがはがれてしまった。

すでにB問題に対応した対策を始めている学校も多い。せめて「応用・活用」のテストの点数を上げるために、「応用・活用」の対策ドリルを繰り返すような最悪のケースだけは避けたい。

◇　◇

全国学力テスト、全教科最下位。その結果は県民を大きく揺さぶったが、テストに表れた「学力」は沖縄にとってどんな意味を持つのか。そもそも「学力」とは何なのか。小学校教諭の山本隆司さんに、国内外の学力テストを通して、沖縄の「学力」について論じてもらう。

やまもと・たかし　1957年、三重県生まれ。小学校教諭、沖教組副委員長。算数教育、平和教育などで、沖縄にこだわった実践を数多く全国に発信している。「ウチナーサンシドリル」など著書多数。



日本の「学び」問われる質

「競争原理を超えて」はタイムス毎金曜連載中

第３回は　２００８年９月２６日（金）朝刊

競争原理を超えて

―算数の学び直し

■3

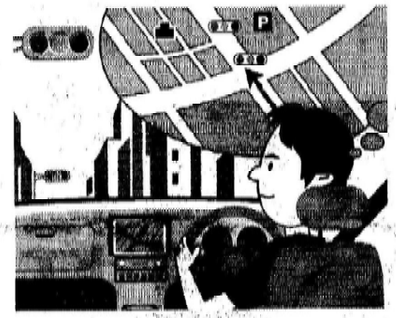
山本 隆司

私は自他共に認める「方向オンチ」である。仕事柄車を走らせて、さまざまな場所に行かざるを得ないので、「カーナビを車に付けた。これは面白い。車を走らせながら信号やお店が分かり、その地図(全体構造)が同時に見えるのである。

「トリの目の学び」(鳥かん図)のように、自己の理解を客観的に見ることは、心理学者のジャン・ピアジェ(スイス)などの提唱している認知心理学の「メタ認知」に該当する。

子どもたちが学ぶ領域・事柄は無限大にあり、一人の人間がすべて習得することは不可能である。知識の量や記録の正確さを競っても、限界があり、やがて忘れることである。

学習を構造化し応用力に



学力とはある程度の個々の事柄を学び記憶し、それを構造化する必要がある。個々の知識が構造化されると、ある規則や法則がみえ、未知の事柄に出会っても、ある程度類推することができる。それが「活用・応用」学力として生きてくる。

多くの学習時間を使い、多くの知識を取得しても、なかなか「トリの目の学び」(メタ認知)ができるものではない。「習熟度別学習」のように、子どもたち一人一人を孤立させたようなドリル学習などでは、なおさら困難になる。

ある学習内容の原理原則を徹底して追究し、人間的なつながりを大事にするような授業スタイルが求められる。一つの問題でも、子どもによってとらえ方が多様であり、理解の道筋も違うものである。自分と違う考え方や理解の仕方を、複眼的に学習することを地道に繰り返すような授業が必要である。

一例をあげると「かけ算」の学習で九九の暗記をいくら繰り返して記憶しても、学力の構造化はできない。たとえば、「2×3」の問題の絵(イメージ)をそれぞれ描いてみる。子どものイメージは複雑多様で、さまざまな絵が予想される。その中から、「かけ算」の世界を表現する一番シンプルで皆が分かるイメージを導き出す。そのイメージをある程度習得させ法則化させることで、自身が納得できる世界をつくり上げていく。子どもは自身の世界で納得できることは自主的に学ぶし、もっと学びたいという学習意欲は自然に生まれてくるものである。

「覚える学習」から「応用・活用型学習」への転換などという言葉をよく聞く。「応用力・活用力」は、「全国学力テスト」の「B問題」のようなドリルを繰り返すことにより身に付くものではない。

「応用・活用」的な学力とは、個別の事例を「(目前にあるものを見る)ムシの目」で学びながら、同時に全体を構造化していく「トリの目」の学びを追究するようなことである。そうすると「学び」の目的を他人との比較や競争においていると、到底この世界に入ることはできないことは言うまでもない。

「ムシの目」と「トリの目」

(小学校教諭)